

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 16 日現在

機関番号：34505

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870960

研究課題名(和文) ネットいじめの生起と対応に関する心理的諸要因の解明

研究課題名(英文) Examination of psychological factors related to occurrence and response to cyberbullying

研究代表者

金網 知征 (KANETSUNA, TOMOYUKI)

甲子園大学・人間科学系・准教授

研究者番号：50524518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ネットいじめの様相に関する基本的認識、被害に対するリスク認知、被害に対する不安、匿名性信念、そして被害予防意識の5つの心理的要因の相互関連性を検証し、ネットいじめ被害・加害の予防と対応に役立つ知見を得ることであった。携帯電話の普及率が95%以上という青年期後期の若者を対象に無記名自記式の質問紙調査を実施した結果、ネットいじめの様相について従来型いじめと同様の理解をしていることが示された。またリスク認知、被害不安はともに過去にネットいじめ被害経験をもつ者は有意に高く、高いリスク認知と被害不安は低い匿名性信念と合わさることで、高い予防意識へとつながることが示された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine various psychological factors related to occurrence and response to cyberbullying. The study focused on 1. the nature of cyberbullying, 2. risk perception of cyber-victimization, 3. anxiety for cyber-victimization, 4. beliefs of anonymity of internet, and 5. preventive attitudes to cyberbullying. Anonymous self-report questionnaire was applied to adolescents. The study revealed that the adolescents perceived the nature of cyberbullying very similar to that of traditional bullying. Those who had previous experiences of cyber-victimization reported higher levels of risk perception and anxiety for cyber-victimization. It is also revealed that both the high levels of risk perception and anxiety for cyber-victimization, in conjunction with low levels of anonymous beliefs, led to high levels of preventive attitudes to cyberbullying.

研究分野：発達社会心理学

キーワード：ネットいじめ 被害リスク認知 被害不安 匿名性信念 被害予防意識

1. 研究開始当初の背景

近年、携帯電話やスマートフォンなどの携帯型通信端末の急速な発展と普及に伴って「ネットいじめ」と呼ばれる新たないじめ行為が注目を集めている。ネットいじめの被害認知率は、小学校で 0.9%、中学校で 5.9%、高等学校でも 16.8% (文部科学省, 2010) と、いじめ全体の認知率からすれば未だ少数であるように思えるが、自分専用の携帯端末を所持する児童の低年齢化に加えて、彼らの利用実態の把握や適切な介入の困難さなどから、今後も増加、深刻化する可能性が極めて高いことが指摘されている。

こうした状況において、子どもたちは常にネットいじめの被害者や加害者になるリスクを抱えているといえようが、子どもたち自身がそうしたリスクについてどれほど自覚しているのかは明らかにされていない。犯罪や防犯に対する施策を立案・実行するためには、対象者の意識・態度と、行動の実態の双方を把握した上で、リスクの伝達を適切に行うことが重要であることが指摘されている (永井, 2011) が、いじめ問題への対応においても同様であろう。ネットいじめについては、これまで行動的側面に関する知見は集積されつつあるが (例えば、Raskauskas & Stoltz, 2007; Smith, Mahadavi, et al., 2008; Gradinger et al., 2009 など)、子どもたちの認識、感情、態度といった心理的諸側面については従来型はいじめと比べると未だ十分に検討されているとはいえず、解明が待たれている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、携帯電話やインターネット (以下ネット) の利用率が特に高い青年期後期の若者を対象に、ネットいじめの生起と対応に関連した心理的諸要因を明らかにし、ネットいじめの予防と対応のためのリスク伝達につながる知見を得ることであった。

ネット上の掲示板、ブログ、SNS といった利用者が相互に情報を発信したり閲覧したりするソーシャルメディア (以下 SM) の利用は若者を中心に増加しており、そこでは匿名でのコミュニケーションが主流であるという (インターネット白書, 2008)。ネットいじめの多くはこのような状況の中で行われていると考えられることから、本研究では、(1) SNS を中心としたネット上で行われる可能性のある異なる 4 種のネットいじめ (①掲示板・SNS での誹謗中傷等の書き込み、②誹謗中傷や嫌がらせのメールの送信、③なりすまし、④画像・動画の無断撮影および掲載) の様相に関する基本的な理解と認識、(2) ネットいじめ独自の特性である匿名性に関する信念、(3) これまで防犯研究の分野で広く議論されてきた被害に対するリスク認知と被害不安の 3 点に注目し、これらの要因の相互の関連性を明らかにするとともに、ネットいじめ関与経験およびネットいじめ関与への予防意識との関連についても検討した。

3. 研究の方法

(1) 平成 25 (2013) 年度調査

① 高校生・大学生を対象としたネットいじめの様相と対応に関する基本的認識と態度を調査するための無記名自記式質問紙を用いた。

② 質問紙は対象者の回答負担の軽減と、異なる手口別の調査・分析の可能性を考慮し、ネットいじめの代表的な手口と考えられる「掲示板・SNS」「メール」「なりすまし」「カメラ・ビデオ」を用いた 4 種の行為別に作成し、各手口について被害/被害見聞経験、被害者の諸特徴と被害理由、加害者の諸特徴と加害動機、被害者加害者間関係、被害深刻度、被害対処可能性、被害不安、被害リスク認知の 8 項目について 5 件法で尋ねた。なお各行為の説明には仮想被害場面を表した刺激文を用い、回答者がその内容を容易に理解できるようにイラストを併せて付した。

(2) 平成 26 (2014) 年度調査

① 前年度と同様に高校生・大学生を対象としたネットいじめ被害及び加害に関連した心理的諸要因を測定するための無記名自記式質問紙を用いた。

② 質問紙は、ネット上での様々な被害に対する一般的なリスク認知及び被害不安を測定するための項目 (荒井・藤・吉田(2010)を参考に作成)、ネット上での匿名性に対する信念を測定するための項目、ネット上での種々のリスク行為 (ネット掲示板・SNS・ブログ等の閲覧・投稿、未知の者とのネット上でのチャット・メールアドレス交換・出会い系サイトへのアクセス、ネット上への自他の写真投稿など) に対する注意の度合いを指標とした予防意識を測定するための項目によって構成された。

4. 研究成果

(1) 平成 25 (2013) 年度調査

高校生 650 人及び大学生 400 人を対象に調査を実施した結果以下の成果が得られた。

① 異なるネットいじめの被害経験及び被害見聞経験については、被害経験を有する者の割合は 1~3% と先行研究と比較しても少数であり、最も多かった手口は「掲示板・SNS」による被害であり、最も少なかったのは「メール」による被害であった。しかしながら、70~80% の者は他者のネットいじめ被害の見聞経験を有していたことから、大多数の者がネットいじめの存在自体は認識していると考えられた。性差について検証すると、女子の方が男子よりも高いことが示されたが「掲示板」による被害経験にのみ有意差が認められた。また学校種別による違いを検証すると、「カメラ・ビデオ」被害を除くすべての被害において高校生よりも大学生の方が割合は高かったが、「掲示板」及び「なりすまし」による被害にのみ有意差が認められた。

② 異なるネットいじめ被害の深刻度については、最も深刻であると認識されていたのは

「なりすまし」被害であり、次いで「掲示板・SNS」被害であった。また最も深刻度が低いと認識されていたのは「メール」被害であった。性差を検証すると、男女ともに「なりすまし」被害と「掲示板・SNS」被害が最も深刻であり、「メール被害」は最も深刻度が低いとの認識であった。すべての被害について女子は男子に比べより深刻との認識であり、有意差が認められた。また学校種間の違いについても検証したが、高校生と大学生との間に有意な差は認められなかった。被害深刻度を被害・見聞経験別に見ると、「メール」被害については被害経験をもつものが最も深刻と認識していたが、「掲示板・SNS」被害、「なりすまし」被害については、未知の者の被害見聞経験をもつ者が最も深刻と認識しており、「カメラ」被害については被害経験も見聞経験も持たない者が最も深刻と認識していた。

③4種の被害に関するリスク認知については、最も被害にあう可能性が高いと認識されていたのは「カメラ・ビデオ」被害であり、次いで「なりすまし」被害であった。また最も被害にあう可能性が低いと認識されていたのは「メール」被害であった。性差を検証すると、男子は「カメラ・ビデオ」、「なりすまし」被害が最もリスクが高いと認識しており、女子は「掲示板・SNS」、「カメラ・ビデオ」被害であった。「なりすまし」を除くすべての被害について女子の方が高い値であったが有意な差は認められなかった。また学校種間の違いについても検証したが高校生と大学生との間に有意な差は認められなかった。被害リスク認知を被害・見聞経験別にみると、すべての被害について、自身が被害経験をもつ者が最も被害にあう可能性が高いと認識しており、次いで身近な者の被害の見聞経験を有するものであった。

④4種の被害に関する被害不安については、最も被害への不安が高かったのは「カメラ・ビデオ」被害であり、次いで「掲示板・SNS」被害であった。また最も不安が低かったのは「メール」被害であった。性差を検証すると、男子は「なりすまし」、「カメラ・ビデオ」被害に対する不安が最も高かったが、女子は「掲示板・SNS」、「カメラ・ビデオ」被害に対する高い不安を示していた。また男女ともに「メール」被害に対する不安は最も低かった。すべての被害について女子は男子よりも高い不安を示しており、統計的に有意な差が認められた。また学校種間の違いについても検証した結果、高校生は「カメラ・ビデオ」被害に対する不安が最も高く、次いで「なりすまし」被害であった。一方大学生は「掲示板・SNS」被害に対する不安が最も高く、次いで「カメラ・ビデオ」被害であった。学校種間の違いについても有意な差が認められた。被害不安を被害・見聞経験別に見ると、「掲示板・SNS」、「メール」、「なりすまし」被害については、身近な人物の被害見聞経験がある者が最も強い不安を感じており、次いで自身が被害経験

をもつ者であった。また「カメラ・ビデオ」被害については、自身が被害経験を有する者が最も強い不安を感じており、次いで身近な者の被害見聞経験を有する者であった。

⑤4種の被害に対する解決可能性については、もし被害にあった際に最も自力で解決しやすいと認識されていたのは「メール」被害であり、次いで「カメラ・ビデオ」被害であった。また最も解決が難しいと認識されていたのは「掲示板・SNS」被害であった。性差を検証すると、男女ともに最も解決しやすいと認識されていたのは「メール」被害であり、次いで「カメラ・ビデオ」被害であった。一方、最も解決が難しいと認識されていた被害は、男子は「掲示板・SNS」被害であり、女子は「なりすまし」被害であった。すべての被害において男子は女子よりも自力での解決に自信を示しており、統計的にも有意な差が認められた。また学校種間の違いについても検証した結果、高校生が最も解決しやすいと認識していたのは「メール」被害であり、次いで「カメラ・ビデオ」被害であった。一方、大学生が最も解決可能と認識していたのも「メール」被害であり、次いで「なりすまし」被害であった。また高校生・大学生ともに最も解決が困難と認識していたのは「掲示板・SNS」被害であった。また高校生はすべての被害において大学生よりも解決に向けた自信を見せており、統計的にも有意な差が認められた。解決可能性を被害・見聞経験別にみると、「掲示板・SNS」「なりすまし」「カメラ・ビデオ」被害については、自身が被害経験を有する者が最も解決できる自信があると認識しており、「メール」被害については、身近な者の被害の見聞経験を有する者が最も解決できる自信があると認識していた。

⑥4種の被害の加害者については、すべての被害について最も加害者である可能性が高いと認識されていたのは「クラスメート」であり、次いで「いじめっ子」「他クラスの生徒」であった。またこの結果は性別、学校種別においても同様であった。

⑦種の被害の加害理由については、「掲示板・SNS」、「メール」、「なりすまし」の3被害で最も可能性の高い加害理由は「相手のことが嫌い／ムカつくから」であり、次いで「面白いから」「ストレス発散」であった。また「カメラ・ビデオ」被害については、最も可能性の高い加害理由は「面白いから」であり、次いで「相手のことが嫌いだから／ムカつくから」「なんとなく」であった。またこの結果は、性別、学校種別においてもほぼ同様の傾向であった。

⑧4種の被害の被害原因については、「掲示板・SNS」、「メール」、「なりすまし」の3被害で最も可能性の高い被害原因は「生意気だから」であり、次いで「周りとう違うから」「空気を読まないから」であった。また「カメラ・ビデオ」被害については、最も可能性の高い被害原因は「特に理由はない」であり、次い

で「周りと違うから」「生意気だから」であった。また「学校でも被害者だから」と従来型いじめの被害を受けていることがネットいじめ被害のリスク要因となっていることも示唆された。この結果は性別、学校種別においてもほぼ同様の傾向が示された。

⑨4種の被害の加害者・被害者間関係については、すべての被害において最も可能性の高い関係性は「リアルな友人同士」であり、次いで「リアルな顔見知り同士」あるいは「ネット上の友人関係」であると認識されていた。すべての被害において、「全く知らない者同士」である可能性は最も低いと考えられていた。この結果は、性別、学校種別にみても同様の傾向であった。

⑩ネットいじめの様相についてまとめると、4種すべての被害事象において、同学年やクラスメートによって加害行為が行われていること、被害者に対する「嫌い／ムカつく」などの否定的感情が加害動機になっており、被害の責任帰属が被害者に向けられていること、また加害者と被害者の関係性が相互によく知った者同士であることなど、多くが従来型いじめに対する意識と類似していることが示された。

(2) 平成 26(2014)年度調査

高校生 200 人及び大学生 300 人を対象に本調査を実施した結果以下の成果が得られた。

①一般的なネット上の被害に対するリスク認知は、5段階評定で平均 3.67 と中程度の認識であった。被害経験及び被害見聞経験の有無による違いを検証すると、自身が被害にあった経験をもつ者のリスク認知は最も高く、次いで身近な者の被害の見聞経験をもつ者、未知の者の被害の見聞経験をもつ者であり、被害経験も被害の見聞経験も持たない者のリスク認知が最も低いことが示された。性差、学校間差ともに有意な差は認められなかった。

②一般的なネット上の被害に対する不安の程度は、5段階評定で平均 3.17 と中程度であった。ネット被害経験及び被害見聞経験の有無による違いを検証すると、自身が被害にあった経験をもつ者の被害不安は最も高く、次いで身近な者の被害の見聞経験をもつ者、未知の者の被害の見聞経験をもつ者であり、被害経験も被害の見聞経験も持たない者の不安の程度が最も低いことが示された。性差、学校間差ともに有意な差は認められなかった。

③インターネット上における匿名性に関する信念については、5段階評定で平均 2.17 と低い値であり、本研究の対象者についてはインターネットの匿名性に関する信念がそれほど強いわけではないことが示された。匿名性信念について被害経験及び被害見聞経験の有無による違いを検証すると、自身が被害経験をもつ者が相対的に最も高い値を示していたが、次いで高い値を示したのは被害経験も見聞経験もない者であった。未知の者や身近な者の被害の見聞経験をもつ者も同程度の認識

であった。性差について検証すると、女子の匿名性信念は男子に比べて相対的に低く、統計的に有意な差が認められた。学校間差を検証すると、高校生と大学生との間には統計的に有意な差は認められなかった。

④ネット上の掲示板・SNS・ブログサイトにおける被害予防意識は、5段階評定で平均 3.29 と中程度であった。被害経験及び被害見聞経験の有無による違いを検証すると、予防意識が最も高かったのは身近な者の被害を見聞した経験のある者であり、次いで未知の者の被害を見聞した経験をもつ者、自身が被害を受けた経験をもつ者であった。被害経験も被害の見聞経験も持たない者は最も予防意識が低かった。しかしながら、被害経験及び被害見聞経験による有意な差は認められなかった。性差、学校間差ともに有意な差は認められなかった。

⑤ネット上での未知の他者とのチャットやアドレス交換、出会い系サイト等へのアクセスに関する被害予防意識は、5段階評定で平均 3.93 と比較的高い値であった。被害経験及び被害見聞経験別にみると、予防意識が最も高かったのは身近な他者の被害を見聞した経験をもつ者と自身が被害をにあった経験をもつ者であった。次いで未知の者の被害の見聞経験をもつ者が続き、被害経験も被害見聞経験も持たない者が最も予防意識が低かった。しかしながら、被害経験及び被害見聞経験の有無による有意な差は認められなかった。性差を検証したところ女子は男子と比べて相対的に予防意識が高く、統計的にも有意な差が認められた。また学校間差を検証したところ、大学生は高校生と比べて相対的に予防意識が高く、統計的にも有意な差が認められた。

⑥ネット上に自身や他者の写真を掲載することに関する被害予防意識は、5段階評定で平均 3.91 と比較的高い値であった。被害経験及び被害見聞経験別にみると、未知の者の被害の見聞経験をもつ者が最も予防意識が高く、次いで身近な者の被害の見聞経験をもつ者であった。被害経験も被害の見聞経験も持たない者が続き、自身が被害にあった経験をもつ者が最も予防意識が低かった。しかしながら、被害経験及び被害見聞経験の有無による有意な差は認められなかった。男女差、学校間差ともに統計的に有意な差は認められなかった。

(3) 平成 27(2015)年度調査

インターネット利用に関わる被害リスク認知、被害不安、匿名性信念、及び被害予防意識の相互関連性について検討したところ、被害リスク認知は、被害不安と有意な正の相関 ($r=.661$) が、また匿名性信念とは有意な負の相関 ($r=-.265$) が認められた。また被害リスク認知と被害不安はいずれもネット掲示板・SNS・ブログ上での活動、ネット上での未知の他者とのチャットやアドレス交換、出会い系サイト等へのアクセス、及びネット上への自他の写真の掲載に関わる各被害への予

防意識とそれぞれ有意な正の相関が認められた(被害リスク認知: $r=.246$; $r=.258$; $r=.221$; 被害不安: $r=.268$; $r=.206$; $r=.164$)。被害リスク認知、被害不安、匿名性信念をそれぞれ中央値を基準に高群と低群に分けて、被害予防意識の差を検証したところ、すべての予防意識において高低群に有意な差が認められた。

以上の結果から、実際の被害に遭うことなく、しかしいつ被害に遭ってもおかしくないリスクは常にあるということを伝え、高いリスク認知をもたせることで高い予防意識を促すことが重要であることが示された。また研究の対象者の匿名性信念は幸いにもそれほど高いものではなかったが、インターネットは決して完全な匿名状態ではないということの的確に伝え、被害に対するリスク認知とともに、加害行為に対しても、それをする中で社会的非難や社会的制裁を受けるリスクがあることを認識させることが重要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ①戸田有一・青山郁子・金網知征、ネットいじめ研究と対策の国際的動向と展望、<教育と社会>研究、査読無、23 巻、2013、23-29.
- ②Tomoyuki Kanetsuna、General perception and understanding for the nature of different forms of cyberbullying among adolescents、甲子園大学紀要、査読無、42 巻、2015、69-73.

[学会発表] (計 7 件)

- ①金網知征、いじめを通してみた日英子ども文化比較、日本感情心理学会第 22 回大会、2014 年 5 月 31 日、宇都宮大学 (栃木県・宇都宮市)
- ②Tomoyuki Kanetsuna、"General perception and understanding for the nature of different forms of cyberbullying among adolescents"、21st World meeting of the International Society for Research on Aggression、2014 年 7 月 5 日 - 19 日、Atlanta、Georgia、U.S.
- ③ Tomoyuki Kanetsuna、"The relationships between risk perception, fear of victimization, and coping potential in cyberbullying"、14th Biennial conference of the European Association for Research on Adolescence、2014 年 9 月 3 日 - 6 日、Izmir、Turkey.
- ④金網知征、ネットいじめ-被害リスク認知・被害不安・匿名性信念-、多様ないじめを考える国際フォーラム、2014 年 10 月 26 日、鳴門教育大学 (徳島県・鳴門市)
- ⑤金網知征・足達昇・山崎澄夫、高校生のネットいじめに対する態度と匿名性信念との関連、日本教育心理学会第 56 回総会、2014 年 11 月 7 日 - 9 日、神戸国際会議場 (兵庫県・神戸市)

⑥金網知征、ネットいじめ被害に関する意識と実態-被害リスク認知・被害不安・予防意識の性差と学校差の検討-、日本教育心理学会第 57 回総会、2015 年 8 月 26 日 - 28 日、朱鷺メッセ：新潟コンベンションセンター (新潟県・新潟市)

⑦ Tomoyuki Kanetsuna、Masato Sawada、"Cognitive-behavioural characteristics of junior-high school students in their involvement of cyberbullying"、17th European Conference on Developmental Psychology、2015 年 9 月 8 日 - 12 日、University of Minho、Braga、Portugal.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金網 知征 (KANETSUNA TOMOYUKI)

甲子園大学・心理学部・准教授

研究者番号：50524518